

研究報告

ピアエデュケーション手法を用いた母性看護学演習の ピアエデュケーターへの教育効果

Educational effects of maternity nursing practicum on the peer educators who utilized peer education

ケニヨン 充子 三里 久美子 岸田 泰子
Michiko Kenyon Kumiko Misato Yasuko Kishida

キーワード：ピアエデュケーション、ピアエデュケーター、学習活動自己評価尺度、セルフ・エフィカシー、教育効果

key words : Peer Education, Peer Educator, Scale of Learning Activities in Nursing Skills Laboratories, Self-Efficacy, Educational Effects

要 旨

目的：ピアエデュケーション手法を用いて母性看護学演習を行い、ピアエデュケーターを務めた学生への教育効果を検証した。

方法：演習でピアエデュケーターを務めた学生7名を対象とした。プログラム前後で、学習活動自己評価尺度とセルフ・エフィカシー尺度（GSES）を調査した。終了後にグループインタビューを行い内容の類似性・共通性によりカテゴリー化した。

結果：学習活動自己評価尺度は、演習後に有意に得点が上昇した。GSESに変化はなかった。グループインタビューから、ピアエデュケーターへの教育効果として【知識・技術の獲得】【自己肯定感の向上】【学習活動への努力】【先輩としての役割獲得】【仲間との学習の協働】の5つのカテゴリーを抽出した。

結論：教育効果として、学習活動の変化、仲間との協働、学習意欲の向上などがみられた。GSESには変化がなかったが、自信の獲得、自己の成長を自覚する機会となっていた。

Abstract

Purpose: A maternity nursing practicum utilizing peer education skills was implemented, and the educational effects on students who served as peer educators were examined.

Methods: The subjects comprised seven students who served as peer educators in the practicum. The self-evaluation scale for learning activities and The General self-efficacy scale (GSES) scores were examined before and after the program. After the conclusion, group interviews were conducted and the content was categorized by similarity and commonality.

Results: The learning activity self-evaluation scale score increased significantly after the practicum. There was no change with respect to the GSES. From the results of the group interviews, the following five categories regarding educational effects on peer educators were extracted: "Acquisition of knowledge and skills," "Improvement of self-affirmation," "Efforts for learning activities," "Acquisition of roles as seniors," and "Collaboration regarding learning with peers."

Conclusion: Changes in learning activities, collaboration with peers, and increased motivation for learning were noted as educational effects. There was no change with respect to the GSES, but it provided an opportunity to gain confidence and realize self-growth.

I はじめに

近年、少子化が進み新生児や乳児との接触体験が全くない学生が大半を占めており、大学内でモデル人形を使用した演習を行なっても、実習では人形との違いに戸惑う学生が多い。また、妊娠褥婦や新生児の入院期間は5～6日間程度と短く、分娩件数の減少に伴い実習中に受け持つ対象者も減少し、学生が看護技術を経験する機会も減少している。実習による実践機会が少ない学生にとっては、実習中に看護技術を修得し、必要な判断が出来るまでに至るには多くの努力を要する。したがって、講義、演習、実習を通して母性看護学の知識や技術を習得し実践につなげていくには、効果的な事前・事後学習が不可欠である。

山下らは、技術習得には教員の丁寧な関わりが重要である一方、学生の主体性・自立性を考慮した教育方法が必要である¹⁾と述べている。これまで看護の教育方法に関して、様々な研究が行なわれているが、基礎看護技術教育でポートフォリオを導入した研究²⁾や母性看護学における Team Based Learning (TBL)を導入した研究³⁾など、学習者が能動的に学習できる教授法や学習法を取り入れたアクティブラーニングを用いることで学習意欲の向上や学びが深まることが明らかになっている²⁻³⁾。

アクティブラーニングの中でも、学習効果を高める教育方法の一つとして、幅広い分野でピアエデュケーションによる教育が活用されている。先行研究では、アルコールハラスメント防止教育⁴⁾や高校生への思春期教育⁵⁾、性教育⁶⁻⁷⁾などの健康教育の分野においてピアによる教育効果が高いことが報告されている。斎藤らのアルコールハラスメント防止教育の研究では、ピアエデュケーションによる教育は、思春期にある対象者にとって、仲間とともに健康課題について自分の問題として考え、自分の行動を見つめなおさせることにつながる⁴⁾と報告されている。栗田らは、思春期ピアエデュケーションを通して、ピアエデュケーターに傾聴能力や自己表現の上達などの効果がみられた⁵⁾ことを報告している。ピアエデュケーションでは、小グループで知識や態度、スキルに関して教育を行うものであるため、ピアエデュケーションを受けた学生のみならず、ピアエデュケーター

にとっても、行動変容や自信を深める体験となるといえる。

健康教育のみならず、佐々木らの研究では、卒業前看護技術演習に教員の他に卒業生インストラクターが参加し指導することで、学生の就職への不安軽減や先輩の姿から自分の成長を期待することが出来た⁸⁾としている。エデュケーターとなるピアは学習者と似た近い存在であることから、学習者はそれをモデルとして学ぶ機会が強化される⁹⁾とされている。また、佐々木らは、卒業生インストラクターにとっても、自分を見つめ更なる自己研磨や目標設定の機会となった⁸⁾と示唆している。

これらのことから、ピアエデュケーションによる教育は、ピアエデュケーターにとっても、自分自身が学習・体験した内容を他人へ説明することによって、記憶の定着につながるとともに、自分自身の理解度を知る機会となり、学びが深まると考えられる。したがって、看護技術習得に向けた演習方法として、ピアエデュケーション手法を用いることで一定の教育効果を得られるのではないかと考える。しかし、看護技術をピアエデュケーション手法で行う場合、健康教育などとは異なり、より正確な知識・技術の習得と臨床での体験がピアエデュケーターに求められる。また、ピアエデュケーションを取り入れるためには、エデュケーターの養成やエデュケーター学生と演習履修学生のスケジュール等、準備や環境を整えることが非常に難しく、看護学の講義・演習など授業内で取り入れている大学は少なく研究報告も十分ではない。

本研究では、母性看護学実習により実践を積んだ学生をエデュケーターとして育成することで、自分で学ぶ姿勢が得られることを期待する。同時に、他の学生へ教授することにより母性看護学への理解も深まると同時に自信につながり、自己効力感が高まるのではないかと考える。

そこで、本研究ではピアエデュケーション手法を用いて母性看護学演習授業を行い、ピアエデュケーターの役割を担った学生への教育効果を明らかにする。

Ⅱ 方 法

1. 研究デザイン

演習プログラム実施前後の比較による評価研究とグループインタビューを用いた混合研究である。

2. 研究対象

母性看護学に関する講義・演習が終了し、実習を終了したもしくは実習中の4年生の学生7名である。

3. 測定用具

1) 「学習活動自己評価尺度

——看護技術演習用——

宮芝らが開発した「学習活動自己評価尺度——看護技術演習用——」¹⁰⁾をプログラム参加前後で使用した。尺度使用にあたっては、使用の許諾を得た。本尺度は、看護技術演習に取り組む学生が自己の行動を客観的に見つめ直し、効果的に学習に取り組めるようその行動を改善する¹⁰⁾ことを目的とし開発されたものである。

本尺度は、【本番さながらに援助する】【学んだことを使い手順に沿って練習する】【技術に自信をもてるように繰り返し練習する】【確実に技術を修得できているかを確認する】【いろいろな方法を使って演習中に生じやすい問題を解決する】【教わったことを理解して取り入れる】【お互いに協力し合いながら練習する】【時間をうまく使って順番に学習する】【時間内に目標を達成できるよう工夫する】の9下位尺度からなりたっている。それぞれの質問項目は「ほとんど当てはまらない」1点から「非常に当てはまる」5点の5段階評価であり、各下位尺度得点は4点から20点、総得点は36点から180点の範囲をとる。総得点は、107点以下が低得点領域、108点以上147点以下の中得点領域、総得点148点の高得点領域¹²⁾とされ、学生個々の総得点に着目することで学習活動の質を把握することができる。尺度の信頼性については、全体の α 係数は0.94、各階尺度の α 係数は0.72～0.86¹⁰⁾と確保されている。

2) 「一般性セルフ・エフィカシー尺度 (GSES)」

ピアエデュケーターの演習前後のセルフ・エフィカシーの変化については、板野らが開発した

「一般性セルフ・エフィカシー尺度 (GSES)」¹¹⁾を購入し使用した。GSESは個人の一般的なセルフ・エフィカシー認知の高低を測定するための質問紙である。セルフ・エフィカシーとは、何らかの行動をきちんと遂行できるかどうかという予期のことであり、そういった予期の一般的な傾向を測定するために開発されたのがGSESである。得点範囲は0～16点であり、高得点ほどセルフ・エフィカシーつまりは自己効力感が高いと判断される。

4. データ収集方法

対象者には、研究参加同意が得られた時点で「学習活動自己評価尺度——看護技術演習用——」¹⁰⁾および「一般性セルフ・エフィカシー尺度 (GSES)」¹¹⁾に回答してもらった。全ての演習終了後、再度、「学習活動自己評価尺度——看護技術演習用——」¹⁰⁾と「一般性セルフ・エフィカシー尺度 (GSES)」¹¹⁾に回答してもらった。グループインタビューは、プライバシーが守られる個室で30～40分程度インタビューを行なった。研究者は対象者全体に、ピアエデュケーターとしての学び、演習プログラム前後での自己の変化、看護技術習得状況などについての質問を投げかけ、ピアエデュケーター同士で自由に語ってもらった。対象者同士で語っている間は、研究者は輪に入らず、心理的負担を与えない距離で見守った。インタビュー前に、対象者らの承諾を得て、適宜、研究者はメモを取り、会話をICレコーダーに録音した。

対象者には、3年生の演習科目「母性看護学援助演習」でのプレゼンテーション実施1か月程度前に集合してもらい、ピアエデュケーターの養成を開始した。集合して行った演習プログラムの練習期間は、およそ7日間程度であった。ピアエデュケーターには、2～3日間程度で授業資料などを用いて知識・技術の復習をしてもらい、練習が不足していた点や不明点を研究者が補足した。その後、「母性看護学援助演習」の際に、デモンストレーションが出来るようそれぞれの実習空き期間に、ピアエデュケーター同士で技術練習を繰り返した。その間、ピアエデュケーターは、プレゼンテーション用の台本を作成するなど技術や知識が正しく教授できるよう各自準備を行った。研

時期	ピアエデュケーション実施前 (1 か月前)				ピアエデュケー ション実施	ピアエデュケーション実施後 (1 か月後)
プログラム 内容	全体 練習	・ 担当技術の決定 (エデュケーター同士の話し合い) ・ 技術練習 (研究者からのアドバイス) ・ 本番さながらの練習 (研究者、エデュケーター同士からのアドバイス)			【演習項目】 6 項目 ・ 妊娠期の観察 ・ 胎盤計測 ・ 産褥期の観察 ・ 授乳の観察 ・ 新生児の観察 ・ 新生児の沐浴	・ プレゼン内容の振り返り ・ 知識、技術の不明点の確認 ・ 3 年生からの質問内容の再学習
	個別 練習	知識・ 技術 復習	台本 作成	プレゼン練習、台本修正		
調査内容	「学習活動自己評価尺度——看護技術演習用——」 「一般性セルフ・エフィカシー尺度 (GSES)」					「学習活動自己評価尺度——看護技術演習用——」 「一般性セルフ・エフィカシー尺度 (GSES)」
						グループインタビュー

図1 プログラム内容と調査内容

究者らは、自己練習を見守り、必要時に技術や知識のアドバイスをを行った。担当する技術項目の選定、教授方法の工夫等については、ピアエデュケーターの自主性に任せた。

研究者らは、ピアエデュケーターや演習履修学生がスムーズに演習に取り組めるよう、演習前日から演習当日にかけて技術の確認などのフォローを行った。ピアエデュケーターが演習履修学生に教授した技術は、「妊娠期の観察」「胎盤計測」「産褥期の観察」「授乳の観察」「新生児の観察」「新生児の沐浴」である。

ピアエデュケーターは、「母性看護学援助演習」の15コマのうち、技術演習8コマ(4日間)のいずれかの日程で、ピアエデュケーションを行った。具体的には、演習履修学生20～21名に対し、40分程度で担当する技術のデモンストレーションを行った。その後、3年生の演習履修学生が技術演習を行なっている場面を見回り、必要に応じて見本を見せ、アドバイスをを行った。研究者は、必要に応じて知識・技術の教授やピアエデュケーターへのフォローを行った。

5. 分析方法

質問紙調査項目については、統計解析ソフト IBM SPSS Statistics24 を用いて記述統計を行った。前後の比較については、正規性を確認した上で、対応のある t 検定により解析を行った。グ

ループインタビュー内容については、逐語録を作成し、内容の類似性・共通性によりカテゴリー化を行った。

6. データ収集期間

2018年5月～7月である。

7. 倫理的配慮

研究対象者に対し、研究の主旨を説明し、以下の倫理的配慮を行った。研究への参加、協力は自由意思に基づくものであること、研究への参加、協力は研究途中であっても中断できること、匿名性の保証およびプライバシーの保護に努めること、データは研究意外には使用しないことを文書および口頭で説明した。さらに、ピアエデュケーターとしての技術・知識を身につけるまでの練習やピアサポートに参加する授業時間の時間的拘束があることを文書と口頭で説明し、同意書への署名をもって同意を得た。本研究は、共立女子大学・共立女子短期大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号18006)。

Ⅲ 結 果

1. 学習活動に関する変化

「学習活動自己評価尺度——看護技術演習用——」の演習プログラム実施前後の得点の変化を表1に示す。「学習活動自己評価尺度——看護技術演習

用——」の総得点（平均値±標準偏差）はプログラム実施前 121.7 ± 16.5 点から実施後 156.9 ± 14.7 点に上昇しており、有意な差が認められた（ $p = 0.002$ ）。

9 下位尺度の変化を見ると、下位尺度Ⅰ～Ⅶ、Ⅸでは、演習前後で得点に有意な差がみられたが、下位尺度Ⅷのみ有意差は認められなかった（ $p = 0.059$ ）

2. 自己肯定感の変化

プログラム実施前後における全体の GSES の得点の変化を表 2 に示す。実施前の GSES は 7.1 ± 2.5 点で、実施後の GSES は 7.3 ± 2.8 点と得点は上昇したが、有意差は認められなかった（ $p=0.873$ ）。

3. ピアエデュケーターへの教育効果

グループインタビューの結果、467 のコードからピアエデュケーターを行った教育効果に関する内容を抽出した。それらのコードから 14 個のサブカテゴリーを生成し、【知識・技術の獲得】【自

己肯定感の向上】【学習活動への努力】【先輩としての役割認識】【仲間との学習の協働】の 5 個のカテゴリーに分類した（表 3）。以下、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを《 》、学生の語りを「 」で示した。

学生は、「結構細かいところまで、勉強して実技で教えたので、例えば、国試の問題とか解いていてもパッと答えられる」と語り、《知識の深まり》を感じていた。また、「外来で沐浴が不安で…って言っている妊婦さんとかいた時に、1 回やっているから教えられる。たぶん友達の子どものか…」と《看護技術の習得》の手ごたえを感じており、【知識・技術の獲得】を実感していた。

「急に、ちょっと教えてって言われたら、あ、いいよって感じ、出来る自信はある」と自分自身が行った技術について話す学生や、「自分が教えたところだけは完全に覚えている自信があって、実習で積極的になれた」と語る学生もおりピアエデュケーターとしての経験が《自信の獲得》につながっていた。さらに、「3 年生をみると、あ、自分成長したなって思える」と語っており、《自

表 1 学習活動自己評価尺度の演習前後の比較

($n = 7$)

項 目	演習前 (平均値 ± SD)	演習後 (平均値 ± SD)	t 値	p 値
Ⅰ. 本番さながらに援助する	14.6 ± 3.6	17.9 ± 2.0	-3.16	0.02
Ⅱ. 学んだことを使い手順に沿って練習する	16.0 ± 2.1	19.1 ± 1.1	-4.46	0.004
Ⅲ. 技術に自信を持てるように繰り返し練習する	11.4 ± 2.9	16.6 ± 2.4	-4.14	0.006
Ⅳ. 確実に技術を修得できているかを確かめる	12.3 ± 3.1	17.6 ± 1.9	-5.32	0.002
Ⅴ. いろいろな方法を使って演習中に生じやすい問題を解決する	11.0 ± 1.6	14.3 ± 2.1	-3.80	0.009
Ⅵ. 教わったことを理解して取り入れる	15.4 ± 1.5	18.4 ± 2.1	-3.81	0.009
Ⅶ. お互いに協力し合いながら練習する	15.4 ± 2.3	18.4 ± 1.7	-3.07	0.022
Ⅷ. 時間をうまく使って順番に練習する	12.7 ± 2.5	16.1 ± 2.6	-2.32	0.059
Ⅸ. 時間内に目標を達成できるよう工夫する	12.9 ± 2.5	16.4 ± 2.5	-2.66	0.038
総 得 点	230.6 ± 31.1	293.3 ± 27.1	-5.325	0.002

表 2 一般性セルフ・エフィカシー尺度の演習前後の比較

($n = 7$)

演習前	演習後	t 値	p 値
7.1 ± 2.5	7.3 ± 2.8	0.16	0.873

(平均値 ± SD)

表3 ピアエデュケーターへの教育効果

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
知識・技術の獲得	知識の深まり	技術を教えることによって自分の知識も深まる
		説明はもう暗記で言えるくらいになっているので、人に説明できる
	看護技術の習得	いつ沐浴教えてといわれても出来るくらい練習していた
		たぶんもう沐浴の手技や知識は忘れない気がする
	復習・再確認の機会	忘れている知識が多いなということの再確認になった
		4年生にとって復習のきっかけ
自己肯定感の向上	自己成長を自覚	3年生をみると自分成長したなと思う
		自分って成長したんだなって
	自信の獲得	自分の自信にもつながって、自分に出来ることが1個増えて、いい経験だった
		自分ががんばってんじゃんみたいな
		実習で積極的になれた
		結構、力がついた
	充実感の体感	楽しかった
		ピアとしての練習や勉強は充実感があった
	自己の再認識	自分を見つめ直す機会になった
		1年前どうだったかなって振り返ると、あんな感じだったかなと
学習活動への努力	教授するための努力	人に教えなきゃいけないから、ちゃんと理解していないといけないという意識があった
		何で？ ときかれたときに答えられないとダメだなと思った
先輩としての役割獲得	後輩との交流促進	後輩と話す機会が増えた
		自分が教えていた後輩の子達と会って、輪、上下関係が広がった
	先輩としての責任感	自分が躓いたところとか、難しかったところは伝えたい
仲間との学習の協働	仲間との学習の研鑽	自分が妊婦や褥婦になったつもりで、ケアされる側の意見とかも出し合ってたのはすごい良かった
		他の練習をしていた学生達とこうした方が3年生に伝わりやすいんじゃないかと話した
	仲間の模倣	自分が見ても上手だな、分かりやすいなというのがあったので、みんなの技術も盗んでいた

己成長を自覚》する機会となり【自己肯定感の向上】につながっていた。

「人に教えなきゃいけないから、ちゃんと理解していないと、という意識が自分にあって」と《教授するための努力》を行った学生や、【学習活動への努力】が見られた。

「後輩と話す機会は増えたかもしれない」「あん

まり残ってない記憶を呼び起こして、3年生の質問に答えた」「(実習で)ここはよく指導者さんに聞かれたから、こういうところはテストにでるんじゃないとか伝えられた」など、演習を通して《後輩との交流促進》があったことを語っていた。さらには、「後輩に実習のこととか伝えたい」「自分の言葉で3年生の力になれるんなら、いく

らでも教えてあげたいと思う」という語りも聞かれ、《先輩としての責任感》が芽生え、ピアエデュケーションにより【先輩としての役割獲得】が見られた。

「お互いの（技術を）見ながらやってた」「（お互いの技術を見ながらやっていたので）自分でやってなくても、やることは全部わかって」「2人で練習したから、結局担当があっても、こっちのことも分かってるし、どうやって教えたらいいかなって（2人で）話し合いながらやってたから」とペアを組んだ《仲間との学習の研鑽》が出来ていたと語る学生が多かった。また、「（他の人のデモをみて）あ～、そうやるんだって思ったら、同じようにやる」「言い回しとかが、そっちの方が聞いてて耳に入ってくるな～みたいのは使ったりしてた」など《仲間の模倣》をしていた。ピアエデュケーターとして演習を遂行するために【仲間との学習の協働】が行われていた。

Ⅳ 考 察

1. ピアエデュケーターへの教育効果

本研究結果から、ピアエデュケーターを経験することにより学習活動の自己評価の得点が上昇することなどいくつかの教育効果があることが明らかになった。他者に正しい知識と技術を教授するためには、事前の繰り返しの準備、練習が非常に重要である。今回の対象者では、学習活動自己評価尺度の下位尺度『Ⅱ. 学んだことを使い手順に沿って練習する』、『Ⅲ. 技術に自信を持てるように繰り返し練習する』、といった項目でプログラム前後に有意な差が認められた。これは、ピアエデュケーターとしての任務を全うするために、繰り返し練習する必要性を痛感し実践できた結果であろう。さらには、自らの学習活動を適切に評価することにつながったと考える。

今村らは、教員は学生が自己教育力を身につけられる教授方法を考える必要があるが、学生自身も能動的な学習姿勢を身につける必要性がある¹³⁾と言及している。ピアエデュケーターを務めるためには、能動的に学習を進めていく必要がある一方、教授する際には、学習活動自己評価尺度の下位尺度である『Ⅳ. 確実に技術を修得できているかを確かめる』といった行動が重要となる。今回、ピアエデュケーターの自主性に任せつつも、必要

時には研究者らからのアドバイスや同じピア同士の支援が得られたことで、ピアエデュケーター育成過程において能動的に学習する能力と他者の力も借りながら学習を進める力が備わっていったのではないかと考える。

宮芝らは、看護学生 700 人余りを対象とした研究で、学習活動自己評価尺度の総得点の平均得点が 127.6 ± 20.2 点であった¹²⁾と報告している。本研究対象者のプログラム実施前の平均得点は 121.7 ± 16.5 点であったことから、平均的な集団であったといえる。プログラム実施前には、108 点以上 147 点以下の中得点領域であった総得点が、プログラム終了後総得点 148 点の高得点領域へ変化していた。これは、一連のピアエデュケーター育成のプログラムを通して、看護技術演習における学習活動の質が高まり、演習目標達成に向けて適切に学習活動が行えた¹²⁾結果であろうといえる。ピアエデュケーターらは、自身が受けた講義・演習・実習で学んだことを基盤に、教授する相手の状況を考慮しながらプレゼンテーション内容を組み立てていた。看護技術演習は、多種多様な授業形態や教授技術を駆使することを求められており、個別指導、集団指導、解説、演示など教育と準備が重要である¹⁴⁾とされている。学生であっても知識・技術をより効果的に教授するために、どのような言葉や見せ方をすればよいか、どのようなレイアウト・物品を使用するかなど考え練習を重ねることは、単に知識・技術の習得のみではなく、目標達成に向けた学習態度やプレゼンテーション能力を育成することにつながったのではないかと考える。

石田らの GSES を用いた研究で、一般学生の平均点は 6.58 ± 3.37 点、看護学生の平均は 8.05 ± 4.05 点であった¹⁵⁾と報告されている。購入した GSES 尺度質問用紙および採点用紙によると、学生の場合、合計得点が 5～8 点でセルフ・エフィカシーの程度を普通と判断している。したがって、本研究の対象者は、プログラム実施前の GSES 得点が 7.1 点であったことから、平均的な集団であったと考える。本研究では、GSES の得点は、プログラム前後で得点の変化は認められなかった。その理由として、セルフ・エフィカシーは個人の行動に対して長期的に影響を及ぼしている¹¹⁾とされ、その人の信念を揺るがすような体

験をしない限りは、大きな変化は認められないのではないかと考える。むしろ、セルフ・エフィカシーの高低が学習活動に影響を及ぼす可能性があるのではないかといえる。今回のピアエデュケーションは、短期的な経験であったことから、自己効力感には影響がなかったことも考えられる。Banduraは、自己効力感には影響する4つの情報、自分で実際に行なってみる「遂行行動の達成」、他者の行為を観察する「代理的经验」、自己教示や他者からの暗示「言語的説得」、生理的な反応の変化を体験する「情動的喚起」がある¹⁶⁾と述べている。グループインタビューの結果を見ると、《教授するための努力》や《看護技術の習得》《知識の深まり》を感じており、「遂行行動の達成」が見られていたのではないかと推察される。また、や《教授するための努力》《仲間との学習の研鑽》はまさしく「言語的説得」がなされていたといえる。他者の行為を観察する「代理的经验」も《仲間の模倣》でみられており、GSES得点の変化には至らなかったが、自己効力感に影響を及ぼす情報の存在が確認できた。

高野らは、エデュケーターを努めた学生の感想として、「自分の成長を認識できた」「実習を通して学んでいたのだとわかった」「後輩との交流ができた」といった内容があった¹⁷⁾と報告している。今回のグループインタビューからも、《自己成長を自覚》、《自身の獲得》、《自己の再認識》など【自己肯定感の向上】していることが明らかになった。また、《後輩との交流促進》《先輩としての責任感》など【先輩としての役割獲得】も感じていた。本研究で新たに、ピアエデュケーターを行うことで、《仲間との学習の研鑽》《仲間の模倣》など【仲間との学習の協働】といった教育効果も得られることが明らかになった。

2. 看護教育への示唆

本研究結果から、ピアエデュケーションを用いた演習技術でピアエデュケーターを務めることで、専門的知識や技術の習得、自己学習の能力向上などの教育効果が得られることが明らかになった。ピアエデュケーションは、実習前後における技術習得のための教育手法として効果的であると考えられる。また、エデュケーターの学生は、臨床現場でも重要となる【仲間との学習の協働】や

【先輩としての役割認識】等も学ぶことになり、技術習得だけにとどまらず、様々な能力を向上させる可能性があることが示唆された。

今村らは、常に学生自身が学習への手ごたえや目標を持って学習できるよう、学生のレディネスに合わせた「仕掛け」が必要である¹³⁾と述べている。今回、エデュケーターを担った学生は、講義・演習・実習を経た学生であった。学習していく上で、実習・演習などで体験したことや仲間と話したり聞いたりしたことは、記憶に定着しやすい上、既に習得した知識と技術をさらに磨いていくという行為が、能動的な学習へとつながったのではないかと考える。さらに、教員に代わって自分たちが後輩に技術を教授するという責任感と教員や後輩学生からの期待を感じることで、自己教育力を伸ばし、自己効力感が向上したと考える。したがって、今回のエデュケーターのレディネスにあった教育介入であったといえる。

他者に技術を教授できるレベルにまでエデュケーターの学生を育成するには、時間と労力が必要になる。また、学生により学習方法は異なり、学生個人に合わせた養成を行うには限界がある。しかしながら、ピアエデュケーション手法で、より質の高い教育を行なうためには、エデュケーターの養成が不可欠である⁴⁾といわれていることから、学生にとってよりよい学習環境で学習が積み重ねられるよう、今回のエデュケーター育成プログラムをより洗練していく必要があると考える。

今後、ピアエデュケーション手法を用いた母性看護学演習の有効性を明らかにし母性看護教育に導入するためには、エデュケーターからの教育を受けた後輩学生への教育効果についても検証が必要である。ピアエデュケーション手法による演習を行うことで双方に教育効果が高いことが明らかになれば、新たな看護技術教育の提案につながるであろう。

研究の限界として、本研究の対象者が7名と少ないこと、対象となった学生が母性看護学への興味が高く意欲的であった可能性もあり、今後さらなる検討が必要になると考える。また、ピアエデュケーターの人数やピアエデュケーター養成方法、プログラム内容などの妥当性に関しても検証が必要である。

V 結 論

ピアエデュケーション手法を用いた母性看護学演習でのピアエデュケーターへの教育効果について検証した。看護技術に関する知識や技術を獲得した上で、後輩に対して看護技術を教授することで、学習活動自己評価の得点に上昇が見られた。GSES 得点には有意差は認められなかったが、ピアエデュケーターを経験した結果、自己肯定感が向上したと感じている学生が存在した。

ピアエデュケーション手法による母性看護学演習では、ピアエデュケーターへの教育効果として、【知識・技術の獲得】のみならず、【学習活動への努力】や【先輩としての役割認識】が備わること、【仲間との学習の協働】が出来ることが明らかになった。

付 記

本研究は、2018 年度総合文化研究所研究助成を受け、研究を行った。本研究の一部は、第 59 回日本母性衛生学会学術集会で発表した。

開示すべき利益相反関係にある企業などはありません。

引用文献

- 山下照美, 小澤絹恵, 嶋崎昌子: 生活援助技術の自己練習前後における自己効力感の変化, 松本短期大学研究紀要, (26), 65-73, 2017.
- 久野暢子, 網木政江, 藤澤怜子: 基礎看護技術教育での学生の学びの深まりを促す教育的介入の検討——ポートフォリオの導入——, 山口医学, 66 (3), 153-161, 2017.
- 中村幸代, 宮内清子, 佐藤いずみ, 竹内翔子: 母性看護学における Team Based Learning (TBL) の導入に関する分析と評価, 母性衛生, 58 (4), 655-663, 2018.
- 斎藤千景, 竹鼻ゆかり: ピアエデュケーションによる大学生へのアルコールハラスメント防止教育の研究, 学校保健研究, 52, 398-406, 2010.
- 栗田佳江, 池田優子, 杉原喜代美他: 看護学生の思春期ピアカウンセリング・ピアエデュケーション活動を通じた学びと自己の変化——グループインタビューの分析——, 高崎健康福祉大学紀要, (6), 51-66, 2007.
- 宮内彩, 佐光恵子, 鈴木千春他: 思春期における性教育としてのピアエデュケーションに関する研究動向, 思春期学, 31 (2), 243-251, 2013.
- 渡部基, 野津有司: 我が国の学校における性・エイズ教育のピアエデュケーションプログラム開発の展望——中学生・高校生を対象としたプログラムの比較——, 日本健康教育学会誌, 13 (2), 68-76, 2005.
- 佐々木俊子, 武田かおり, 阿部準子他: 看護大学生の卒業前看護技術演習の効果, 名寄市立大学紀要, 9, 117-125, 2015.
- Gilbert GG, Sawyer RG: Health education creating strategies for school and community health, Jones and Bartlett Publishers, Boston, 129-131, 2004.
- 宮芝智子, 舟島なをみ: 看護学生のための学習活動自己評価尺度——看護技術演習用——の開発, 千葉看護学会誌, 17 (2), 31-38, 2011.
- 坂野雄二, 東條光彦: 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み, 行動療法研究, 12 (1), 73-82, 1986.
- 宮芝智子: 学生の自己評価を支援する, 舟島なをみ監修, 看護実践・教育のための測定用具ファイル第 3 版, 医学書院, 東京, 263-273, 2016.
- 今村圭子, 山口さおり, 中俣直美他: 基礎看護技術を学習する看護学生の自己教育力に影響する要因の分析, 鹿児島大学医学部保健学科紀要, 28 (1), 31-39, 2018.
- 宮芝智子: 看護学演習と教授活動・学習活動, 舟島なをみ監修, 看護学教育における授業展開, 医学書院, 東京, 127-154, 2016.
- 石田貞代, 望月好子: 看護婦・看護学生の GSES 得点と臨床経験年数との関連, 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 10, 137-145, 1996.
- Albert Bandura: 激動社会の中の自己効力, 本明寛, 野口京子訳, 金子書房, 東京, 129-131, 2015.
- 高野真由美, 松本佳子, 山之井麻衣: 先輩が後輩を導く老年看護方法演習の相互学習効果, 川崎市立看護短期大学紀要, 16 (1), 65-71, 2011.